

書籍流通の二翼を担う モンゴルの古本屋

マンドハイ・ルハグワスレン

●社会主義時代

ごく最近まで、といってももう既に二六年以上経とうとしているが、モンゴルには古本屋は一軒だけ存在した。その名も「古書珍本屋」という一階建ての国营書店が六〇年代初めにウランバートル市内の中心「ツール・レストラン」近くにできたのがそれだ。それが議会制民主主義を導入し、市場経済へ移行する一九九〇年代まで国内における唯一の古本屋だったという。一九二四年にソ連に次いで二番目の社会主義国家となったモンゴルでは、モンゴル人民革命党による一党体制の下、国立出版局が出版物を製作し、その管轄下にあった全国の国营書店を通して販売を行っていた。それが一九九一年に始まる民営化の嵐にさらされ、「古書珍本屋」を含むすべての国营本屋が閉鎖し、書籍専門の販売

店が一時期街から姿を消した。政治・経済・社会的変化の波に攫われ、配給食糧制度が導入されるに至るなか、だれも本屋経営など考える余裕がなかったに違いない。しかしながら、各県の県庁所在地に存在した地方図書館もすべて閉鎖され、倉庫に放置されていた本がやがて個人の手に渡ったこともあり、急激に増えた「交渉店」という名のつく雑貨屋さんで本が売られるようになった。なかには個人が持っていた書籍を街中で売り始める者もいた。こうしてモンゴルにおける個人型古本売買取がスタートした。

●市場化の波に乗って

多くが店を構えるための資金不足などを理由に道端での営業を行っており、現在も大抵の古本業者は店を構えておらず、露店での営

業を継続している。現在ウランバートル市内でこうした個人型古本業者が立ち並ぶエリアは教育大学の東側セレベ川沿いの一カ所に集中している。数年前までは旧国立デパートの北側にある「ウルト・ツアガーン」という名の通りにも雑貨屋さんにまぎれて数人が営業を行っていたが、現在は営業していない。両者とも筆者が高校生から大学時代にかけて、書籍専門店がほぼ存在せず、その扱う冊数も限られていた時代であったために、学校で使う教科書や辞書、外国語教科書や社会主義時代に出版されたモンゴルの文学作品を求めて



セレベ川沿いの古本売り場（筆者撮影）



セレベ川沿いの古本売り場内装（筆者撮影）

よく足を運んだ。教育大学の東側の売り場は、当時は個人がながしかの台を持ち込んで、その上に本を並べるといったシンプルなものだったが、二〇一五年の八月に筆者が取材に訪れた時は、プレハブ建ての小屋が建設されており、各個人はその中に書棚を並べブー型の店舗を構えていた。二〇一二年からウランバートル市の支援の下、土地の利用許可が下りたため売り場を建設し、維持費を毎月出し合って共同運営をしているのだそう。壁際には歴代の作家の肖像画が飾られ、売り場ごとに本棚とテーブルが置かれており、明るく開放的な雰囲気になっている。入り口から一歩中に足を踏み入れると、すぐにどんな本を探しているのか両側から質問攻めに遭う。古本商売も激しい競争にさらされ



ベテランのバーサンドルジ氏
(筆者撮影)

ているのが肌で感じ取れる。目当ての本の題をいえばその本があるかどうか、あるとすれば誰が持っているかなどすぐに教えてくれる。ふらっと入って本をじっくりみるというのにはあまり適していない環境だ。各売り場に専門分野があるというわけではなく、まんべんなく需要が高いものを扱うのが一般的ということだった。価値ある本ですでに絶版となり、書店では手に入らないような本は棚の奥の方にしまつてある。どんなものに興味があるかを聞かれ少し話をするとこんなのはどうかといった感じで出してくる。値段も交渉によって決まるため同じ人からまとめて買えば買うほど、値段も下がる。数名の店主に話を伺ったところ、主な客層は大学の講師の他、モンゴルに留学中の学生が多いと話だった(不思議なことにモンゴル人の学生はあまり来ないという)。しかしながら、インターネットの普及や近年の書店の増加により売上げが減ったのも事実だそう。

●ある古本売りの話

市場化の波にのり、古本ビジネスを始めたバーサンドルジ氏(名字はナツアグドルジだが、モンゴル人は名前だけを使う)に話を伺った。彼は教育大や「ウルト・ツアガン」の集団営業には参加せず、チンギス・ハーン広場の横、国会議事堂の斜め前に立つ中央郵便局のビルの前を販売スペースとしている。社会主義時代には長くバスの運転手をしていたが、怪我のため働けなくなり生活の糧とするために本を売り始めた。昔から文学が好きで集めていた本を売り出し、徐々に冊数を増やした。売り出した初日に当時の価格で工場員の一月分の収入に匹敵する金額が手に入り、記念に母親と三人の妹と一緒に近くの写真屋で写真を撮ったのが一九八九年一月だったという。本人の話によれば彼が古本売りとしての第一号であり、一九九〇年一月には三人になり、五月には八人に増え、現在公式の数字はないが、三〇〇人あまりが古本売りとして活動しているという。彼は自分が扱う本のほとんどに目を通しており、特に伝統医療関係の本に興味を持っているという。現在彼は四人の子どもを育て

ているが、育てるうえでなるべく薬を使わないようにしているのも本と触れ合っただけで生きてきたおかげだという。扱う本に特に専門性を設けている訳ではないが、意識して扱わない本の種類が三つある。ひとつは小中高生の教科書類だ。金銭的に余裕のない母親が子どもに買ってあげられず子どもにみせる顔がなくなるのを嫌がって、というのが理由だ。そして金銀装飾が入った稀覯本などは法律上の理由で扱っていない。そして最後はアダルト系のものだ。彼は長年同じ場所で本を売り続け、今では本を売りに来る常連さんもいるという。彼はリクエストがあればそれに答えるべく、お客や他の本売りに連絡を取り探し出すという。

こうした古本売りに未だに需要があるのは、モンゴルの人口は三〇〇万人と出版市場として小さく、一冊あたりの印刷部数在三〇〇〜五〇〇程度であり、再版も少ないため売り切れれば本屋で新刊本を入手できなくなるケースが多いからである。モンゴル出版社協会の職員によれば、現在全国で出版業務に携わっている会社は一六〇あまりあるが出版編集業務全般を担う業社は少なく、印刷業務を主とする印刷工場のような会社がほとんどであるという。したがってモンゴルでは本の出版から宣伝広告、配本まですべてを著者自身が担うケースが多く、各書店の在庫補充システムなども未発達なままだ。新刊本といえども、町の書店でスムーズに手に入る状況にあるとは言い難い。実際、書籍を専門とする大型店舗ができたのも大手出版社ADMONが経営するINTERNON書店がオープンした二〇〇四年が初めてだ。INTERNONは元々現在入っている建物の二階で古本も扱っていたが現在は新刊本専門となっている。現在ではINTERNON以外でも書籍専門店が増え、海外の書籍の翻訳本や、児童本など様々なジャンルの本が店頭に並ぶようになったものの、いずれも印刷部数の限りから一旦売り切れれば探しだすのが困難になる。このように書籍の流通制度が全体的に未熟であるなか、モンゴルの古書店は同国における書籍の流通の大事な一翼を担う存在であるといえる。

(Mandkhai Lkhagvasuren / 東京大学人文社会系研究科アジア史専修博士課程)